

- 1 教育事業名 「無人島アドベンチャーキャンプ 2015」
～ 友情・絆・感動体験！僕らだけの無人島 ～
- 2 ね ら い 普段の生活に必要な電気、水道、ガス、風呂、トイレ、テレビ・ラジオ・携帯電話等のない無人島で食料の調達から火お越し、調理やテント設営、トイレ作り等を、異年齢の仲間と協力し活動する中で、たくましさ、やさしさ、連帯意識の高揚を図るとともに、新たな自分を再発見することで自己肯定感を高め、主体的に「生きる力」を身につけていくことを目的とする。さらに、近年重要視されている防災教育の面から、災害時に適切に対応する能力の育成を図る。
- 3 期 日 平成 27 年 7 月 27 日（月）～8 月 2 日（日） 6 泊 7 日
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家
- 5 募集定員 24 名
- 6 参加人数 24 名
- 7 参加者内訳 小学生 12 名、中学生 12 名（男性 12 名、女性 12 名）
（県内 21 名、滋賀県 1 名、栃木県 1 名、東京都 1 名）
- 8 カウンセラー 大城敏氏（パドリングがイド漕店代表） 森 有紀子（読谷村観光協会）
山下智郁（アミークス小学校教諭） 伊波兼誠（看護師）
山田武英（石垣青少年の家専門職員）
具志堅大周（糸満青少年の家専門職員）
島袋真丞（糸満青少年の家専門職員）

9 実施プログラム

月日(曜)	朝食	活動内容					宿泊
		午前	昼食	午後	夕食	日没後	
7 月 27 日 (月)		オープニング オリエンテーション	注 弁	ビバーク用テントの作り 方 野外炊飯講習会 大型カヌーの基礎	全 体 炊 飯	無人島での生活計画 装備品パッキング ふりかえり	キャン プ 場
7 月 28 日 (火)	軽 食	大型カヌーで無人 島へ <班別活動> ビバーク用テント 作り	野 外 炊 飯	<班別活動> 釣りや貝の漁労講習会 スノーケリング講習	野 外 炊 飯	<班別活動> ボンファイヤー ふりかえり	儀志 布
7 月 29 日(水) 7 月 30 日(木)	野 外 炊 飯	<班別活動> 釣りや貝の漁労 班で計画	野 外 炊 飯	<班別活動> 釣りや貝の漁労 班で計画	野 外 炊 飯	<班別活動> ボンファイヤー ペアキャンプ(4日目)	儀志 布
7 月 31 日(金) 8 月 1 日(土)	野 外 炊 飯	<全体活動> 釣りや貝の漁労 追い込み漁	野 外 炊 飯	<班別活動> 班で計画 パーティー準備	全 体 炊 飯	<全体活動> ソロキャンプ 分かち合いの集い	儀志 布
8 月 2 日(日)	軽 食	かたづけ 船で移動	レ ス ト ラ ン	ランチパーティー エンディング		泊港にて保護者と一 緒に ふりかえり	

10 事業の様子



初めてのシュノーケリング



火起こしは大変だ！



ブルーシートが布団



さあ！無人島へ出発だ！



約1時間半で、無人島へ到着



防災用トイレの説明



ビバーク用テント設営



釜戸をつくり食事の準備



タコ！とったどー



今日はごちそうです。



みんなで食べるご飯はおいしい



無人島の朝、ZZZ・・・



竹竿つり。釣果は・・・



これが釣果です。



追い込み漁の準備。



追い込み漁。収穫に感謝



魚のさばき方講習



無人島最後のお別れ会

11 参加者の声（事後アンケートより）

- ・「釣りやシュノーケルなど初めて体験することがたくさんあり、とても楽しかった」
- ・「ブルーシートで寝るのは、最初きつかったけど、慣れると大丈夫だった。」
- ・「カヌーはきつかったけど、皆で協力して無人島に行けたので良かった。」
- ・「自分でびっくりしたのは、生き物嫌いの自分が魚をさばけるようになったことです。」
- ・「これからは、いろんな事にチャレンジしていこうと思えるようになった。」等、普段の生活では体験できないことを経験し、たくましく成長できたのではないかと感じる。

12 担当者所見

無人島チャレンジ初日は、本施設キャンプ場でのビバークということもあり、水道やトイレ、シャワー等が自由に使える状況であった為、誰しもが普段のキャンプを楽しんでいる様子であった。その日は、無人島へ行ったときの火起こしの練習やビバークテントの設営の仕方、班での役割分担を話し合うなど、計画通りに1日目を終了した。

2日目快晴、無人島へ大型カヌー2隻で出発。無人島までは、1時間半から2時間の距離。皆が力を合わせなければ2時間以上かかるかもしれない。そんな気持ちがあったのか、出発の時には声も出なかった子ども達が、自然と声を掛け合い、櫂をそろえ、一生懸命にカヌーを漕いでいる様子に、子ども達同士の連帯意識や協力心が芽生えたと感じた瞬間であった。

約1時間半で無人島に無事到着。到着後から、防災用トイレの設置、ビバークテントの設営、火起こし、釜戸作り等々、無人島生活の準備が始まった。中には、「本当は、あまり無人島に行く気はなかった」という子どもや泣きそうな表情の子どもなどもおり、これから始まる無人島生活に期待や不安を抱いている、皆の様子がひしひしと伝わってきた。

3日目からは、竹竿やシュノーケリングによる魚釣りによる食材調達や火起こし、飯ごうの準備、追い込み漁に向けての準備等々、それぞれが自分の役割を自覚し班の一員として一生懸命に取り組む中で、確実に子ども達の何かが変わりつつあると感じた。途中、暑さに体調を崩しかけた子どももいたが、班員の励ましなどもあり、全員で無人島キャンプをやり遂げることができた。

事後の感想でも、「火起こしに4時間もかかり、火の大切さがわかりました」「魚をさわることができなかったけど、さわれるようになった」「班の～ちゃんが体調を崩して心配だったけど、元気になって良かった」「班やその他の皆と無人島で過ごせたことが一生の思い出です」など、子ども達自身が、他者との関係作りや助け合いも含め、「生きる」とは何かについて考える良い機会になったのではないかと考える。

担当者として、「ガスや水道、電気の大切さ」「互いに助け合い協力することの大切さ」「日々収穫した、様々な生き物が自分たちの命をつないでいることへの感謝」「ブルーシートが布団や家の代わりになること」等々、子ども達が体験することにより身につけたスキルは、今後の学校生活や将来の進路に僅かながらでも、有益な影響を与えてくれると確信している。「子ども達はできないのではなく、経験がないからできないのである。」そんなことを思いながらも、子ども達の目を見張るような成長に、「体験」させることの意義や意味を改めて再認識することのできた事業であった。

（課題）

- ・活動の中盤に、体調を崩す参加者が4名いた。何事もなかったが、自己管理や暑さへの適切な対応も含めた指導の方法について検討するとともに、用意した梅干しの量を多めにするなどの、対応も必要である（次年度は、たくあんを準備することも検討）。
- ・カウンセラーから、「班の人数が多く、他の人に頼りすぎる子もいた。（8名編成）」という意見もあり、自己の役割をより意識し活動できるような班編制の工夫が必要である。
- ・カウンセラーの人材確保及び看護師免許を有するスタッフの確保など人材バンクの構築を図っていくことが必要である。